

『野球を正しく理解するための野球審判員マニュアルー規則適用上の解釈についてー第3版』

2018年・2019年修正一覧

ページ	現 行	修 正	備 考				
21	1 1845年に初の野球規則が誕生	<p>1 1845年に初の野球規則が誕生 表の末尾に次を追加する。</p> <table border="1"> <tr> <td>2018</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 定義38の[注]を削除し、5.07(a)(1)および(2)に規定された投球動作に違反した投球を反則投球としないこととした。 故意四球の申告制を採用した。 </td> </tr> <tr> <td>2019</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 投手の準備投球に関する「8球以内、1分間以内」の制限がなくなる。これに伴い社会人野球と大学野球は、投手がイニング間にベンチ前やブルペンでキャッチボールすることを禁止した。 1チーム（監督、コーチ、選手）が1試合あたりにマウンドに行ける回数の制限が新規に規定された。 投球カウントの誤りがあっても、そのままプレイが続行された場合のルールが明確になった。 </td> </tr> </table>	2018	<ul style="list-style-type: none"> 定義38の[注]を削除し、5.07(a)(1)および(2)に規定された投球動作に違反した投球を反則投球としないこととした。 故意四球の申告制を採用した。 	2019	<ul style="list-style-type: none"> 投手の準備投球に関する「8球以内、1分間以内」の制限がなくなる。これに伴い社会人野球と大学野球は、投手がイニング間にベンチ前やブルペンでキャッチボールすることを禁止した。 1チーム（監督、コーチ、選手）が1試合あたりにマウンドに行ける回数の制限が新規に規定された。 投球カウントの誤りがあっても、そのままプレイが続行された場合のルールが明確になった。 	<p>2018 改正</p> <p>2019 改正</p>
2018	<ul style="list-style-type: none"> 定義38の[注]を削除し、5.07(a)(1)および(2)に規定された投球動作に違反した投球を反則投球としないこととした。 故意四球の申告制を採用した。 						
2019	<ul style="list-style-type: none"> 投手の準備投球に関する「8球以内、1分間以内」の制限がなくなる。これに伴い社会人野球と大学野球は、投手がイニング間にベンチ前やブルペンでキャッチボールすることを禁止した。 1チーム（監督、コーチ、選手）が1試合あたりにマウンドに行ける回数の制限が新規に規定された。 投球カウントの誤りがあっても、そのままプレイが続行された場合のルールが明確になった。 						
26	6 コブバット	<p>6 コブバット 最後に次のパラグラフを追加する。</p> <p>なお、バットのグリップエンドの先端が太く長い「こけし型バット」については、規則3.02(a)において特に制限されていないので、極端に大きく長いものでなければ認めることとしている。</p>	2019 追加				
27	8 着色バット	<p>8 着色バット 最後に次のパラグラフを追加する。</p>	2019 追加				

		フレームテンパー（焼き加工）については、2018年のシーズンから、①バットの握り部分端から18インチ（45.7cm）より先端に施すこと、②塗装カラーではないので、表示が容易に見える濃さまでの焼き加工とすること、③それぞれの表示は焼印によるか、焼印の自然色または黒色とすることとされた。	
32	16 ヘルメットの着用	16 ヘルメットの着用 最後に次のパラグラフを追加する。 2018年シーズンの頃からNPBの一部の選手が「フェイスガード付き打者用ヘルメット」を使用し始めたが、アマチュア野球ではSG基準（一般財団法人製品安全協会が認定）を満たす製品ではないため、使用を認めない方針とした。	2019 追加
33	23 グラウンド内に何物も置いてはいけない 攻撃側プレーヤーは、・・・、持ち帰らなければならない。フェア地域と・・・、何物も残しておいてはならない。(3.10)	23 グラウンド内に何物も置いてはいけない 33 ページ第1パラグラフに続いて次の下線部を追加する。 攻撃側プレーヤーは、・・・、持ち帰らなければならない。フェア地域と・・・、何物も残しておいてはならない。(3.10(a)) <u>2018年(OBRは2017年)の改正により、規則3.10の見出しが「競技場内からの用具の除去」から「競技場内の用具」に変更され、それまでの本文が(a)項となり、新たに次の(b)項が追加された。</u> <u>(b)シフトを取るために、野手の守備位置を示す、いかなる印も競技場内につけてはならない。</u> <u>数年前からMLBでは極端な守備シフトが目につくようになっていた。例えば、強打の左打者が打席に立つと一・二塁間に3人の内野手が位置するなどである。日本でも「王シフト」や「松井シフト」と言われる守備体系がとられたこともある。</u> <u>この規定は、2016年にMLBのある球団が、変則的な守備位置にレーザーなどを活用してマークをつけていたことが明るみになったようで、これを禁止するために新設された。</u>	2018 改正
48	13 タイブレーク	13 タイブレーク 48 ページ最後のパラグラフから 49 ページ上から2行目までを次のように	2018 改正

	<p>現在では、国際大会はもちろん、国内の大会でもタイブレークの適用が主流となっている。各連盟によるタイブレークの規定は、次のとおりとなる。</p> <p>WBSC (・・・): ・・・</p> <p>社会人: ・・・</p> <p>大学: ・・・</p> <p>高校: ・・・</p> <p>軟式: ・・・</p>	<p>変更する。(下線部が変更部分)</p> <p><u>その後、国際大会はもちろん、国内の大会でもタイブレークの適用が主流となっている。2017年の各連盟によるタイブレークの規定は、次のとおりであった。</u></p> <p>WBSC (・・・): ・・・</p> <p>社会人: ・・・</p> <p>大学: ・・・</p> <p>高校: ・・・</p> <p>軟式: ・・・</p> <p><u>WBSCが継続打順制に変えたことから、国際大会の規定に合わせるため、2018年のシーズンから社会人、大学、高校がノーアウト一・二塁、継続打順制に変更した。</u></p> <p>WBSC (・・・): 10回から、ノーアウト一・二塁、<u>継続打順制</u></p> <p>社会人: 10回または12回から、<u>ノーアウト一・二塁、継続打順制</u></p> <p>大学: 10回から、<u>ノーアウト一・二塁、継続打順制</u></p> <p>高校: 13回から、<u>ノーアウト一・二塁、継続打順制</u></p> <p>軟式: 13回から、<u>ノーアウト一・二塁、継続打順制</u></p>	
49	<p>14 没収試合</p> <p>アマチュア野球では、登録外選手が試合に出場するケースが続出したことから、上記に加え、次の場合も没収試合としている。(平成19年(2007年)日本アマチュア野球規則委員会通達)</p> <p>(1) 登録外選手が試合に出場した場合(登録外選手が出場したとか、本来退いたはずの選手</p>	<p>14 没収試合</p> <p>49 ページ下から10行目以降を次のように変更する。(下線部が変更部分)</p> <p>アマチュア野球では、登録外選手が試合に出場するケースが続出したことから、上記に加え、2007年に日本アマチュア野球規則委員会(当時)の通達により、次の場合も没収試合とした。</p> <p>(1) 登録外選手が試合に出場した場合</p> <p>(2) 主催者または各団体が特に定めた場合</p> <p><u>ところが、その後も登録外選手の出場あるいはメンバー表の誤記などの単純ミスによる没収試合があったこと、また、2018年の規則改正により5.10(d) [原注]に「いったん試合から退いたプレイヤーの再出場」に関する規定が追加されたことから、2018年2月にアマチュア野球規則委員会が上記(1)の内容を一部変</u></p>	2018 改正

	<p>(例えば代打を出された)が再び出場してしまったとか) (2) 主催者または各団体が特に定めた場合 なお、アマチュア野球では、・・・。</p>	<p><u>更する(単純な登録ミスの場合には没収試合とはしない) 通達を出した。</u> <u>処置3: 登録外選手が試合に出場、これがプレイ後に判明したときは、大会規定により試合中であれば没収試合とし、試合後であればそのチームの勝利を取り消し、相手チームに勝利を与える。</u> <u>ただし、上記は、</u> ① <u>登録外選手が、自チームの所属以外の選手であった場合に適用することとする。</u> ② <u>単純なミスの場合(監督とマネージャーの連絡ミスで、登録外選手が自チームの所属選手である場合など)には適用しない。</u> a) <u>試合中に判明した場合は、その時点でメンバー表に記載されている選手に交代させ試合を継続する。それ以前の当該選手のプレイはすべて有効とする。</u> b) <u>試合後に判明した場合でも、当該選手のプレイはすべて有効とし、処置3は適用されない。</u> <u>この通達にある「登録」とは、「試合ごとに試合前に提出されるメンバー表に記載されたこと」を示す。</u> なお、アマチュア野球では、・・・。</p>	
53	3 フェアプレイ	<p>3 フェアプレイ 53 ページの末尾に次を追加する。</p> <p>この「ミットを動かすな運動」にアマチュア野球界全体で取り組んできたが、まだまだ徹底されているとは言えない現状があることや、2017年3月に行われた2017 WORLD BASEBALL CLASSICにおいて、日本戦の球審を担当した複数の外国人審判員から、日本の捕手がミットを動かしているとの指摘があったことなどを踏まえ、2018年2月、アマチュア野球規則委員会は、マナーアップ、フェアプレイの両面から上記の(1)から(3)の行為を慎むよう、再度通達した。</p> <p>余談になるが、国際大会において日本の審判員が、外国人審判員からたびたび次のような指摘を受けたことをお伝えしておく。 『日本のキャッチャーは、なぜミットを動かすのだ。我々をだまそうとしてい</p>	2018 改正

		るのか。しかし、ジャッジはしやすい。きわどいコースのときは、彼（捕手）がミットを動かしたら、自己申告のとおりボールとコールすればいい。』	
56	11 四球の場合の進塁義務 ボール4個で打者はアウトにされる恐れなく一塁に進むことができる。 したがって、四球で……。 打者（四球を得て走者になった）は、……。 もし、走者が安全進塁権を得た塁を踏まないで次塁へ進もうとした場合、……。(5.06(b)(3) [付記])	11 四球の場合の進塁義務 56 ページ第1パラグラフの1行目に次の文を追加し、第3パラグラフの次に次の文を追加する。（下線部が追加部分） ボール4個を得て、または故意四球の申告により、打者はアウトにされる恐れなく一塁に進むことができる。 <u>(5.05(b)(1))</u> したがって、四球で……。 打者（四球を得て走者になった）は、……。 もし、走者が安全進塁権を得た塁を踏まないで次塁へ進もうとした場合、……。 <u>(5.06(b)(3) [付記])</u> なお、故意四球の申告が行われるときはボールデッドであるから、上記のように走者が安全進塁権を得た塁を滑りこしたり、踏み損ねたりしてアウトになるケースは、通常では起こりえない。 <u>(定義7)</u>	2018 改正
56		12 故意四球の申告制 2018年（OBRは2017年）の改正により、次の「故意四球の申告制」に関する規定が追加された（下線部が追加部分）。 5.05(b)(1)原注： <u>監督からのシグナルを得て審判員より一塁を与えられた打者を含む、ボール4個を得て一塁への安全進塁権を得た打者は、一塁へ進んでかつこれに触れなければならない義務を負う。</u> 9.14(d)： <u>守備側チームの監督が、打者を故意四球とする意思を球審に示して、打者が一塁を与えられたときには、故意四球が記録される。</u> 定義7： <u>打者が打撃中にボール4個を得るか、守備側チームの監督が打者を故意四球とする意思を審判員に示し、一塁へ進むことが許される裁定である。守備側チームの監督が審判員に故意四球の意思を伝えた場合(この場合はボールデッドである)、打者には、ボール4個を得たときと同じように、一塁が与えられる。</u> 申告制の故意四球は、試合時間の短縮を図るために新設されたもので、要約すると次のようになる。	2018 新規追加 以下番号を繰り下げる

		<p>① 故意四球とする場合、必ず申告制にしなければいけないわけではない。</p> <p>② 守備側チームの監督が審判員に故意四球の意思を示せば、投手は実際に投球することなく、打者を一塁に歩かせることができる。この場合はボールデッドとなる。</p> <p>③ 攻撃側チームが拒否することはできない。</p> <p>④ カウントの途中からでも、守備側チームの監督の意思表示があれば認められる。</p> <p>⑤ 交代して出場した投手が、最初の打者を故意四球の申告により1球も投げないで歩かせた場合も、規則 5.10(g)の義務を果たしたことになるので、次の打者のときに交代することができる。また、一塁に進んだ打者はこの投手の自責点の対象となる。</p> <p>この故意四球の申告制は、WBSC（世界野球ソフトボール連盟）の大会においても、2018年のシーズンから適用される。</p> <p>なお、故意四球の申告制は、2006年に台湾で開催されたインターコンチネンタルカップで採用されたことがある。当時の国際野球連盟（IBAF）が導入し、監督の申告後、投手に1球を投げさせてから球審が打者に一塁を与えた。</p>	
66	<p>21 ボールの進路が変わって(Deflected)ボールデッドの個所に入った</p> <p>しかし、規則説明では、・・・投球当時から2個の塁が与えられるとしている。</p> <p>この規定は、・・・。</p>	<p>21 ボールの進路が変わって(Deflected)ボールデッドの個所に入った</p> <p>66 ページ1行目の後に次の文を追加する。</p> <p>しかし、規則説明では、・・・投球当時から2個の塁が与えられるとしている。<u>規則 5.06(b)(4)(H)[規則説明]は、2018年の規則改正により OBR と同じ記述に変更されたが、その内容には変わりはない。</u></p> <p>この規定は、・・・。</p>	2018 改正
83	<p>43 アピールプレイ</p> <p>上記のように、「アピールの送球が悪送球となってボールデッドの</p>	<p>43 アピールプレイ</p> <p>83 ページ第2パラグラフと(4)の間に次のセンテンスを追加する。</p> <p>上記のように、「アピールの送球が悪送球となってボールデッドの個所に入れ」ば、・・・、いずれの走者へのアピールは許されないということになるわけ</p>	2018 改正

	<p>個所に入れ」ば、・・・、いずれの走者へのアピールは許されないということになるわけである。</p> <p>(4)インニングの表または裏が終わったときのアピールは、・・・。</p>	<p>である。</p> <p><u>このことを明確にするため、2018年の改正で次の〔注2〕を追加した(次ページの例題(7)、(10)参照)。</u></p> <p><u>〔注2〕: 投手または野手のアピールのための送球がボールデッドの個所に入った場合、それはアピールの企てとみなされ、アピール権は消滅する。したがって、その後、いずれの塁、いずれの走者に対するアピールは許されない。</u></p> <p>(4)インニングの表または裏が終わったときのアピールは、・・・。</p>	
87	43 アピールプレイ	<p>43 アピールプレイ</p> <p>(12)に次を挿入し、以降繰り下げる。</p> <p>(13)ワンアウト走者三塁。打者は浅い外野フライを打った。三塁走者は、タッグアップしようとしているが、少しでも加速をつけて走ろうと三塁ベースの後方からスタートした。外野手からの返球があったが、本塁はセーフとなった。三塁走者は、外野手が捕球した時点よりも後に、走りながら三塁に触れていた。これは、正規なりタッチの方法か。また、走者をアウトにするにはアピールが必要か。</p> <p>——正規なりタッチの方法ではない。守備側がアピールすれば、走者はアウトになる。</p> <p>いわゆる“フライングスタート”が正規なりタッチでないことは規定されていたが、そのような行為を行った走者に対して、審判員が自らアウトを宣告できるのか、それともアピールが必要なのかははっきりしていなかった。2019年の改正で5.09(c)(1)【原注】の末尾に「このような走者は、アピールがあればアウトとなる。」が追加され、“フライングスタート”は守備側のアピールがあればアウトが宣告されることが明確になった。</p>	2019 改正
94	<p>47 コーティシーランナー(臨時代走)</p> <p>(1)打者が死球などで負傷した場合 投手と捕手を除いた選手うち、打</p>	<p>47 コーティシーランナー(臨時代走)</p> <p>94 ページ上から 18、20 行目を次のように修正する。(下線部が修正部分)</p> <p>(1)打者が死球などで負傷した場合 <u>投手を除いた選手のうち、打撃を完了した直後の者とする。</u></p>	2018 修正

	<p>撃を完了した直後の者とする。</p> <p>(2)塁上の走者が負傷した場合 投手と捕手を除いた選手のうち、その時の打者を除く打撃を完了した直後の者とする。</p>	<p>(2)塁上の走者が負傷した場合 <u>投手を除いた選手のうち、その時の打者を除く打撃を完了した直後の者とする。</u></p>	
96		<p>49 <u>いったん試合から退いたプレーヤーの再出場</u> 2018年の改正により、5.10(d)の1段目が改正され(下線部を追加)、また、同[原注]の末尾に下線部のセンテンスが追加された。</p> <p><u>5.10(d) : いったん試合から退いたプレーヤーは、その試合に再出場することはできない。すでに試合から退いたプレーヤーが、何らかの形で、試合に再出場しようとしたり、または再出場した場合、球審はその不正に気付くか、または他の審判員あるいはいずれかのチームの監督に指摘されたら、ただちに当該プレーヤーを試合から除くよう監督に指示しなければならない。その指示がプレイの開始前になされたときは、退いたプレーヤーに代わって出場しているべきプレーヤーの出場は認められる。しかし、その指示がプレイの開始後になされたときは、すでに試合から退いているプレーヤーを試合から除くと同時に、退いたプレーヤーに代わって出場しているべきプレーヤーも試合から退いたものとみなされ、試合に出場することはできない。プレーヤー兼監督に限って、控えのプレーヤーと代わってラインアップから退いても、それ以後コーチスボックスに出て指揮することは許される。</u></p> <p><u>5.10(d) [原注] : すでに試合から退いているプレーヤーが試合に出場中に起こったプレイは、いずれも有効である。プレーヤーが試合から退いたことを知っているながら再出場したと審判員が判断すれば、審判員は監督を退場させることができる。</u></p> <p>この規則は、OBRでは2010年に追加された。日本野球規則委員会では2011年の規則改正の際に、この規則の採用について検討したが、この規則が分かりづらいこと(OBRの“substitute player”と“substituted-for player”の訳し方が難しい)、また、再出場は考えられないことなどから、改正を見送った経緯があ</p>	2018 新規追加 以下番号を繰り下げる

		<p>る。しかし、アマチュア野球では過去に交代したプレーヤーが再出場して問題となったケースがあり、また、最近になって大学の公式戦で実際に起こったことから、「原文に忠実に」の方針から、2018年に我が国の規則書に追加することとされた。なお、“substitute player”を「退いたプレーヤーに代わって出場しているべきプレーヤー」、「substituted-for player」を「すでに試合から退いているプレーヤー」と訳した。</p> <p>例1：5回の表、二塁手Aの打順にBが代打で出場し、内野ゴロを打って3アウトになった。監督はBがそのまま二塁に入ると球審に告げたが、なぜかAが二塁の守備についていた。5回の裏、プレイが開始される前に塁審が気づき、球審に指摘した。</p> <p>処置1：球審はAを試合から除き、Bの出場は認められる。</p> <p>例2：例1と同じ状況で、5回の裏、これにだれも気付かず、投手が1球（ストライク）を投げた後に、相手チームが球審に指摘した。</p> <p>処置2：球審はAを試合から除き、Bも退かせ、代替りの者を二塁につかせる。打者のカウントは1Sから再開される。</p> <p>例3：5回の表、二塁手Aの打順にBが代打で出場し、内野ゴロを打って3アウトになり、Bがそのまま二塁の守備についていた。9回の裏、なぜかAが二塁の守備についていたが、誰にも指摘されず投手が1球（ストライク）を投げた後、相手チームが球審に指摘した。</p> <p>処置3：球審はAを試合から除き、Bも退かせ、代替りの者を二塁につかせる。それまでのプレイはすべて有効とされ、打者のカウントは1Sから再開される。</p>	
97	50 ダッグアウトから出てはいけない	<p>50 ベンチ前のキャッチボール 表題を「ベンチ前のキャッチボール」に変更する。 第4パラグラフの最後の一文を削除し、代わりに次のセンテンスを追加する。（下線部が追加部分）</p> <p>したがって、・・・、実は規則違反ということになる。国際大会では、・・・、罰金をとられることもある。</p>	2019 変更 2018 修正

<p>は、・・・、罰金をとられることもある。わが国でも早期にこの規則違反の慣行が是正されることを望んでいる。</p>	<p><u>こうしたことから、アマチュア野球規則委員会はプロ側とも協議して、東京オリンピックを2年後に控え、2018年2月に規則の厳格適用を目指すこととした通達を出した。本来なら、プロを含めた日本の野球界全体で一斉に実施したいところだが、ベンチ前のキャッチボールが長年の習慣として定着していることや、アマチュア野球のそれぞれの団体に使用する球場設備の問題等の諸事情を勘案して、実施時期は各団体に任せることにしたが、2020年までの完全実施を目標にしている。</u></p> <p><u>これを受けて、社会人野球と一部の大学野球リーグでは、2018年のシーズンから規則 5.10(k)を厳格適用することとし、投手と野手のベンチ前でのキャッチボールを禁止するとともに、投手の準備投球を規則通り1分以内、8球以内としたが、球場内にあるブルペンでのキャッチボールは認めることとした。</u></p> <p><u>しかし、2019年の規則改正で、投手の準備投球に関する「8球以内、1分間以内」の制限がなくなった(5.07(b)、5.10ℓ原注)。社会人野球と大学野球は、この改正を採用し、2019年のシーズンから投手は制限なしで準備投球をしてもよいことにしたが、これに伴い、インニング間の投手や野手のベンチ前やブルペンでのキャッチボールを禁止した。</u></p> <p><u>このことに関する規則上の裏付けを整理すると、次のようになる。</u></p> <p><u>まず、規則定義 12 “BENCH or DUGOUT” では、次のように規定している。</u></p> <p><u>ユニフォームを着たプレーヤーおよび控えのプレーヤー、その他チームのメンバーが実際に競技にたずさわっていないときに、入っていなければいけない施設である。</u></p> <p><u>この定義 12 により、大原則として、プレイをしている者以外は競技場内に入ることは許されない。しかしながら、5.10(k)には次のように書いてある。</u></p> <p><u>両チームのプレーヤーおよび控えのプレーヤーは、実際に競技にたずさわっているか、《競技に出る準備をしている》か、あるいは一塁または三塁のベースコーチに出ている場合を除いて、そのチームのベンチに入っていなければならない。</u></p>	<p>2019 修正</p>
--	---	----------------

		<p><u>5.10(k)は、試合を円滑に進めるために、特例としてベースコーチと次打者についてはベンチにいらなくてもよいこととしており、規則書巻頭の競技場の区画線にもその場所が定められている。</u></p> <p><u>また、この規則の《競技に出る準備をしている》(OBRでは「preparing to enter the game」)とは、これから試合に出場する選手のことであり、具体的には、ブルペンで投球練習を行う投手を指すものである。すなわち、試合開始前であれば先発投手であり、試合が始まってからは、これから救援で出場する予定の投手のことである。</u></p> <p><u>なお、「ブルペン」という言葉は、公認野球規則の定義の中に記述はなく、また競技場の区画線の図表の中にも記載はない。ちなみに、「ブルペン」を辞書で引くと、「野球場にある、試合に出ていない投手の投球練習場であり、かつては、安価な客席と兼用となっていた「牛の囲い場」を意味するものである」とある。</u></p>	
100		<p>55 投球カウントの誤りの訂正</p> <p>2019年の改正で8.02(c)の末尾に次の一文が追加された。 「投球カウントの誤りの訂正は、投手が次の打者に1球を投じるまで、または、イニングや試合の最終打者の場合には、守備側チームのすべての内野手がフェア地域から離れるまでに行わなければならない。」</p> <p>投球カウントの誤りがあり、そのままプレイが続けられた場合の取り扱いについて、2018年までは明確ではなかったが、この改正によってその処置方法が規定された。</p> <p>例題1：2ストライク後の投球を打者が見逃してストライクが宣告されたが、打者はそのまま打者席に残り、守備側も審判員も気づかずプレイが続けられ、打者は次の投球を打ってヒットとなった。</p> <p>例題2：2アウトのとき、3ボール後の投球がボールとなったが、打者が一塁に行かずプレイが続行され、打者は次の投球を打ってアウトとなった。</p> <p>例題1場合はその打者の次の打者に対して投手が1球を投じる前に、例題2</p>	2019 新規追加 以下番号を繰り下げる

		<p>の場合は守備側チームのすべての内野手がフェア地域から離れるまでに、誤りに気づいて訂正を申し出れば、正しい状態に戻せる。訂正を申し出るのは、監督や選手、審判員など誰でもできる。また、公式記録員は9.01 (b) (2)【注】に定めるように誤りを知らせることができる。</p> <p>この OBR 改正の採用を検討する際に、この改正文は 8.02(b)の末尾に追加したほうが適当ではないかという意見があった。確かに、8.02(b)は審判員の規則適用に関するアピールを規定していて、8.02(c)はアピールに対して他の審判員の意見を求めることができることを定めている。このため、この規則改正の趣旨を MLB 関係者に確認したところ、「8.02(b)は監督だけがアピールできるケースの規定であるが、8.02(c)は監督以外でもアピールできるケースの規定であるため 8.02(c)に加えた」との回答であった。</p> <p>なお、この改正に伴い、8.02(b)【注1】「イニングの表または裏が終わったときは、投手および内野手がフェア地域を去るまでにアピールしなければならない。」は、5.09 (c) のアピールプレイの項の本文に記載があり、8.02(b)で重複記載する必要はないのとの判断から削除し、同【注2】を【注】とした。</p>	
106	<p>1 ワインドアップポジション</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>[注1] アマチュア野球では、・・・。 (1)・・・。 (2)・・・。</p> </div>	<p>1 ワインドアップポジション</p> <p>106 ページ末尾に次のセンテンスを追加する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>[注1] アマチュア野球では、・・・。 (1)・・・。 (2)・・・。</p> </div> <p>2018年(OBRは2017年)の改正により、5.07(a)(2)[原注]の末尾に次の一文が追加された。</p> <p>投手は投球に際して本塁の方向に2度目のステップを踏むことは許されない。塁に走者がいるときには、6.02(a)によりボークが宣告され、走者がいないときには、6.02(b)により反則投球となる。</p> <p>2015年、MLBのマーリンズに在籍していたカーター・キャップス投手(右投げ)の投球スタイルが話題になった。セットポジションから投球動作を始め、踏み出した左足が地面に着く直前、投手板についている右足をホームプレート</p>	2018改正

		方向に 50 センチほど移動させ、そこから左足をさらに踏み出して投げる。MLB では当初は黙認されていたが、2017 年から規則違反の投球動作とされた。今回の改正は、このような動作を禁止するためのものである。	
108	4 “二段モーション” 自由な足と同様、……。(5.07(a)(2) [注 2])	4 “二段モーション” 第 2 パラグラフと第 3 パラグラフの間に次の文を追加する。 自由な足と同様、……。(5.07(a)(2) [注 2]) 2017 年のシーズンまでは、上記のような規定となっていて、審判員は走者がいないときはボールを、走者がいるときはボークを宣告していた。しかし、2018 年の規則改正で、定義 38 (反則投球) の [注] が削除された。 [注] 投手が 5.07(a)(1)および(2)に規定された投球動作に違反して投球した場合も、反則投球となる。 この改正は、我が国の投手の投球動作に関するものだけでなく、野球のマナーに関する大きな、そして重要なものである。 まずは、アマチュア野球規則委員会の通達 (2018 年 2 月) の全文を掲載したい。 今年度の改正では、国際基準に合わせて、定義 38 の [注] が削除されることになりました。これにより、いわゆる“二段モーション”といわれる投球動作に対しては、走者がいないときにはペナルティを課すことがなくなります。つまり、走者がいない場合に違反しても、これまでのように“ボール”を宣告することはなくなります。 MLB や WBSC の国際大会において、“二段モーション”が反則投球とされないのは、定義 38 の [注] が英文の規則書にはないのが、一つの大きな理由でした。さらに、外国では“二段モーション”のような動作が、威力のある強い投球をするためには理にかなっていないと考えられていることも理由の一つです。この点については、投手の投球動作について、科学的視点からの理論付けを日本野球科学研究会の専門家をお願いすることにしていきます。	2018 改正

		<p>我が国での“二段モーション”の始まりは、何とかして打者のタイミングを外そう、打者を幻惑しようとする投球動作がルーツです。マナー面の問題としても許されない動作を規制するため当時の規則委員会では日本独自の[注]を設けて対応してきましたが、現在では打者にとっての不利益を与えるような問題はなくなってきているものの、ナチュラルな投球動作とは言えない“二段モーション”と言われる動作が根絶されていないことは事実です。</p> <p>今回の改正で、走者がいない場合はペナルティを課すことはなくなり、これまでしばしば問題となっていた、反則投球とする基準が不明確、大会によって適用がまちまち等の混乱はなくなるはずです。</p> <p>しかし、技術的な面においても、マナーの面においても“二段モーション”は望ましい投球フォームではないという考え方に変更はなく、我々はあくまでも正規の（ナチュラルな）投球動作の確立を目指すことは変わりありません。</p> <p>コリジョンルールの採用によって、捕手の“ブロック”というプレイがなくなったことにより“ブロック”という言葉も使われなくなってきました。同じように、我が国の野球界から“二段モーション”という言葉が忘れ去られる日を目指したいと思います。</p> <p>今回の改正は、反則投球の取り扱いについて大きな改正ですが、指導者、選手、審判員には改正の趣旨を正しく理解していただけるよう周知・徹底をお願いいたします。</p> <p>この規則改正の経緯について整理しておきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1971(S46)年、定義38の[注]が追加された。これは、当時の王選手の本足打法に対して、何とかタイミングを外すため背面投法をする投手も現れるなどしたため、打者のタイミングを外したり、打者を幻惑したりする投球動作を禁止するために規定された。 ・1995(H7)年頃から、プロ野球で自由な足を上下させてから投球する投手が出始めた。 ・1996(H8)年のプロ・アマ合同野球規則委員会において、自由な足を上下させたり、ぶらぶら振るのは”natural”な投球動作ではないから許されないこ 	
--	--	--	--

		<p>とが確認され、プロ・アマを問わず正しい野球に向けて取り組んでいくこととした。</p> <p>参考：1996 公認野球規則の「はしがき」(抜粋)</p> <p>今年は、・・・野球が正式種目になって二度目のオリンピックがアトランタで開催される。全世界に通用する一本化された野球規則を目標に審議を重ねた。規則 8.01(a)の① (現 5.07(a)(1)①)、同 (b)の② (現 5.07(a)(2)②) を太字にして注意を喚起するのも、いま見過ごされている疑わしい投球動作に釘をさそうという狙いがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1997(H9)年以降、毎年のようにプロ・アマ合同野球規則委員会において、いわゆる投手の“二段モーション”について意見交換が行われた。その際、アマチュア側から、プロ野球が与える影響が大きいと、プロ側の規則適用に関する要請が行われた。 ・2005(H17)年 (アテネ五輪の翌年)、アマチュア側の要請にプロ側も動き、NPB 野球規則委員会が、“二段モーション”の投手がさらに増加し、国際大会やアマチュアへの影響を考えるとそのまま放置できないとして、2006年のシーズンから規則 8.01(a)・(b) (現 5.07(a)(1)・(2)) を遵守・実行する旨を決定した。これにより10年間にわたる“二段モーション”論争もやっと終止符が打たれ、正しい投球動作の徹底に向けて、プロとアマがそろって一歩を踏み出すことができた。 <p>この頃、すでにアマチュアでも年齢に関わらず“二段モーション”で投球する投手が増えていて、上記通達に書かれている「反則投球とする基準が不明確、大会によって適用がまちまち等の混乱」が「しばしば問題」となっていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016(H28)年、WBSC の U23 ワールドカップ (メキシコ) の韓国対メキシコ戦において、球審を務めた日本の審判員が走者なしのケースで反則投球を適用した。守備側の監督から抗議があり、WBSC の審判長を含めて協議した結果、反則投球の判定を取り消した。 ・2017(H29)年、西武ライオンズの菊池雄星投手などに反則投球が適用され、 	
--	--	--	--

		<p>投手の“二段モーション”が話題になった。</p> <p>・2018(H30)年、プロ・アマ合同野球規則委員会において、定義 38 [注] を削除する改正が決定された。</p> <p>ここで強調しておきたいのは、上記通達の中にある「技術的な面においても、マナーの面においても“二段モーション”は望ましい投球フォームではないという考え方に変更はなく、我々はあくまでも正規の（ナチュラルな）投球動作の確立を目指すことに変わりはない」ということを、プロ・アマ合同野球規則委員会で確認していることだ。</p> <p>定義 38 の [注] の削除により、走者がいる場合のボークの適用を整理すると、次の表のようになる。</p>		
	<p style="text-align: center;">事 例</p>		<p style="text-align: center;">罰 則</p>	<p style="text-align: center;">適用規則</p>
1	<p>ストレッチをしようとした動作を開始したが、途中でやめた。</p>		ボーク	<p>6.02(a)(1) 5.07(a)(2)</p>
2	<p>ストレッチの途中でいったん動作が止まったが、そのまま両手を合わせてセツポジションをとった。</p>		ボーク	<p>6.02(a)(1) 5.07(a)(2)</p>
3	<p>投球動作を開始して自由な足を上げたが、途中でやめて投球しなかった。</p>		ボーク	<p>6.02(a)(1) 5.07(a)(1),(2)</p>
4	<p>投球動作を開始して自由な足を上げ、いったん動作が止まったが、そのまま投球した。</p>		ボーク	<p>6.02(a)(1) 5.07(a)(1),(2)</p>
5	<p>投球動作を開始して自由な足を上げ、いったん動作が止まったが、そのまま塁に送球した。</p>		ボーク	<p>6.02(a)(1) 6.02(a)(3) 5.07(a)(1),(2)</p>
6	<p>投球動作を開始して、自由な足を上げ下げして、そのまま投球した。</p>		ボーク	<p>6.02(a)(1) 5.07(a)(1),(2)</p>
7	<p>投球動作を開始して、自由な足を上げ下げしてから、塁に送球した。</p>		ボーク	<p>6.02(a)(1) 6.02(a)(3) 5.07(a)(1),(2)</p>

		<p>※プロ野球では、ケース6について、自由な足を上げ下げして投球することは「一連の投球動作」との考えからボークとしない。</p> <p>※アマチュア野球では、走者が塁にいないとき、セットポジションをとった投手が完全に静止しないで投球した場合、規則 5.07(a)(2)[原注]の後段に該当すると審判員が判断すれば、クイックピッチとみなしてボールを宣告する場合がある。(下記「7 走者がいないときはセットポジションで静止しなくてもよい」参照)</p> <p>※上記の表に該当しなくても、ボークルールの原点である [6.02a 原注] を厳格に適用することが求められる。</p> <p>最後に、投球動作を開始してから自由な足をいったん止めたり、または上げ下げしてから投球することに関する、ロドリゲス WBSC 審判長 (USA) のコメントを紹介したい。</p> <p>『そのような投球動作をする投手が増えてきている。サンフランシスコ・ジャイアンツのジョニー・クウェイト投手は、いろいろ奇妙な動きをしてから投球している。しかし、ルールブックは、そのような投球をイリーガルピッチとしていない。U23 ワールドカップのとき、日本の審判員がイリーガルピッチを宣告したが、アメリカの塁審がそれを変更したのも、それが理由だ。</p> <p>ところで、そのような投球動作は、アジアの投手がアメリカに来てから多く見かけるようになった。』</p>	
108	<p>5 投手が投げる際にグラブを叩く</p> <p>投手が投球動作に移り、投げる際に両手を大きく離し、その後もう一度グラブを叩いてから投球する動作は、アマチュア野球では、投球動作の変更とみなして、指導事項として注意する。走者がいる場合も同様</p>	<p>5 投手が投げる際にグラブを叩く</p> <p>次のように変更する。(下線部が変更事項)</p> <p>投手が投球動作に移り、投げる際に両手を大きく離し、その後もう一度グラブを叩いてから投球する動作は、アマチュア野球では、投球動作の変更とみなすが、<u>上記「4 “二段モーション”」の項で書いた理由により、走者がいる場合にのみ指導事項とする。</u>ただし、注意にもかかわらず繰り返されたときは、ボークを宣告する。(5.07(a)(2) [注 2]、<u>6.02(a)(1)</u>)</p>	2018 改正

	の処置をとる。ただし、注意にもかかわらず繰り返されたときは、走者のいないときは反則投球(ボール)、走者がいるときはボークを宣告する。(5.07(a)(2) [注2])		
109	7 走者がいないときはセットポジションで静止しなくてもよい [注1]アマチュア野球では、本項[原注]の前段は適用しない。	7 走者がいないときはセットポジションで静止しなくてもよい 109 ページ末尾に次のセンテンスを追加する [注1]アマチュア野球では、本項[原注]の前段は適用しない。 2018年の規則改正において、定義38の[注]が削除された(上記「4 “二段モーション”」参照)。アマチュア野球では、走者が塁にいないとき、セットポジションをとった投手が完全に静止しないで投球した場合、規則5.07(a)(2)[原注]の後段に該当すると審判員が判断すれば、クイックピッチとみなしてボールを宣告する場合がある。	2018 改正
109	8 投手のウォーミングアップの制限	8 投手のウォーミングアップの制限 全文を次のように差し替える。 2019年の改正で、5.07(b)と「【5.100原注】の4段落目末尾」が次のように改められた。(実線部を改正、点線部を削除) 5.07(b) : 投手は各回のはじめに登板する際、あるいは他の投手を救援する際には、捕手を相手に8球を超えない準備投球をすることは許される。この間プレイは停止される。各リーグは、その独自の判断で、準備投球の数や時間を制限してもさしつかえない。このような準備投球は、いずれの場合も1分間を超えてはならない。(以下略) 【5.100原注】 : リリーフ投手は、審判員の適宜な判断において、8球またはそれ以上の必要な準備投球が許される。	2019 改正

		<p>投手が各回のはじめにマウンドに上がって行う準備投球について、2018年までの規則で定められていた球数（8球以内）および時間（1分以内）ともに制限がなくなった。</p> <p>この改正は、一見、試合時間の短縮に逆行するものではないかと思われる。しかし、MLBの実情からすると、2018年（OBRは2017年）の故意四球の申告制の採用（5.05(b)(1)原注、定義7）や、2019年（同2018年）の「マウンドに行ける回数の制限」（5.10(m)）の新設と同じく、スピードアップのルールのような。2018年のシーズンからインニング間の時間を、地元テレビ局で中継される公式戦の場合は2分25秒から2分5秒に、全米中継では2分45秒から2分25秒に、それぞれ20秒短縮し、準備投球はインニング間の制限時間の20秒前になったらできなくなるとのこと。こうすることにより、投手は8球以内、1分以内の準備投球が保証されなくなった。</p> <p>5.07(b)では各リーグが準備投球の数や時間を制限することは許されるので、我が国のプロ野球や高校野球、軟式野球では、2018年までの取り決めや運用をそのまま適用することとした。</p> <p>社会人野球と大学野球では、2015年に「社会人及び大学野球における試合のスピードアップに関する特別規則」を定め、投手の準備投球を5球以内としたが、2018年のシーズンからは（大学は一部のリーグで実施）、規則5.10(k)を厳格適用することとし、投手と野手のベンチ前でのキャッチボールを禁止するとともに、投手の準備投球を当時の規則通り1分以内、8球以内としたが、ブルペンでのキャッチボールは認めることとした。</p> <p>そして、2019年の改正を受けて、投手は準備ができるまで制限なしで準備投球ができることとし、これに伴い、インニング間の投手や野手のベンチ前やブルペンでのキャッチボールを禁止するように上記「特別規則」を改正した。（「VI-50 ベンチ前のキャッチボールの禁止」を参照。）</p> <p>この特別規則の改正に際し、社会人野球と大学野球の一部の関係者からは、今</p>	
--	--	--	--

		までのスピードアップの取り組みに反するのではないかとの疑問が寄せられた。しかし、両団体の規則・審判所管委員会は、WBSCのランキングが1位である(2019年2月現在)日本が、世界標準の規定であり、国際大会では厳守されている5.10(k)(ベンチ前でのキャッチボールの禁止など)を遵守すべきである、遵守できないはずはないという考えから、「投手の準備投球」と「ベンチ前のキャッチボール」の両方を「OBR(世界標準)のとおり」とするために、特別規則の改正に踏み切った。	
110	10 投手の守備位置の変更 もし同一イニングで投手がマウンドに戻った場合、その投手は通常どおり8級の準備投球が許される。	10 投手の守備位置の変更 一段目の最後の文を次のように修正する。(下線部が修正点) もし同一イニングで投手がマウンドに戻った場合、その投手は <u>必要な</u> 準備投球が許される。	2019 改正
111	11 マウンドに行く回数	11 監督・コーチがマウンドに行ける回数 表題を上記に変更する。	2019 改正
113	11 マウンドに行く回数 交代で出てきた投手は、審判員の判断で、場合によっては8球以上の準備投球をすることができる。	11 監督・コーチがマウンドに行ける回数 113 ページ上から第3センテンスの最後の一文を次のように修正する。(下線が修正点) 交代で出てきた投手は、審判員の適宜な判断で、 <u>必要な</u> 準備投球をすることができる。	2019 改正
113	11 マウンドに行く回数 コーチ兼任の場合、・・・、その後マウンドに行く回数には数えられることを通告する。	11 監督・コーチがマウンドに行ける回数 113 ページ下から4行目に、114 ページ最後のセンテンスを移動し、以下114 ページまでをすべて削除する。 コーチ兼任の場合、・・・、その後マウンドに行く回数には数えられることを通告する。	2019 修正

	社会人野球および大学野球では「社会人野球および大学野球における試合のスピードアップに関する特別規則」・・・	<u>アマチュア野球では、所属する団体または連盟によって、スピードアップルールの取り決めがなされている。</u>	
114		<p>12 マウンドに行く回数の制限</p> <p>2018年のOBR改正を基に、2019年に「マウンドに行く回数の制限」として公認野球規則に新規項目 5.10 (m) および【注】を追加した。</p> <p>以下の規則は、メジャーリーグで適用される。マイナーリーグでは、1試合のマウンドに行ける回数について、本項規定と異なる制限を設けてもよいし、制限を設けないこともできる。</p> <p>(1) 投手交代を伴わないでマウンドに行くことは、9イニングにつき1チームあたり6回に限られる。延長回については、1イニングにつき1回、マウンドに行くことができる。(※この項は監督、コーチ、選手が対象)</p> <p>(2) 監督またはコーチが投手と話すためにマウンドに行った場合、回数に数える。また、野手が投手と相談するために守備位置を離れた場合や投手が野手と相談するためにマウンドを離れた場合も、位置や時間にかかわらず回数に数える。ただし、次の場合を除く。(以下の(A)～(D)は野手が対象)</p> <p>(A) 打者が打撃を完了して次の打者が打席に入るまでの間、投手と野手がいずれも守備位置から離れずに話し合いが行なわれた場合。</p> <p>(B) 雨天時に野手がスパイクの汚れを払うためにマウンドに行った場合。</p> <p>(C) 投手の負傷、または負傷の可能性があるために、野手がマウンドに行った場合。</p> <p>(D) 攻撃側チームによる選手交代の通告後、野手がマウンドに行った場合。</p> <p>(3) サインの確認——1試合（または延長回）で決められたマウンドに行くことができる回数を使い果たした後に、捕手が出したサインについて投手と</p>	2019 新規追加 以下番号を繰り下げる

		<p>意思の確認ができていないと球審が判断した場合には、捕手からの要求があれば球審は捕手に少しだけマウンドに行くことを認めてもよい。決められた制限回数を使い果たす前にサインの確認のためにマウンドに行った場合は、回数に数える。</p> <p>【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。</p> <p>これは、MLB で新たに設けられたスピードアップに関する規定だ。末尾の【注】の通り、我が国では、以前から各団体が定めているスピードアップルールを継続することとした。</p>	
127	<p>25 イリーガルピッチのペナルティはどの時点で適用するのか</p> <p>イリーガルピッチでも打者は打てるので、即ボールデッドではなく、球審は“イリーガルピッチ！”と発声するのみで、・・・ペナルティを適用する。自由な足に関するイリーガルピッチ(一時停止や二段モーションなど)の場合には、・・・“ワンボール”を宣告する。</p> <p>ただし、投手が投げなかったときは、投手に投球を最初からやり直させる。(6.02(b)、定義 38)</p>	<p>25 イリーガルピッチのペナルティはどの時点で適用するのか 最初のセンテンスの 3 行目後半から下線部のように変更する。</p> <p>イリーガルピッチでも打者は打てるので、即ボールデッドではなく、球審は“イリーガルピッチ！”と発声するのみで、・・・ペナルティを適用する。<u>ただし、投手が投げなかったときは、投手に投球を最初からやり直させる。</u></p> <p><u>2018 年の規則改正 (定義 38 の [注] の削除。前掲の「4 “二段モーション”」参照。)により、自由な足の一時停止や二段モーションなどは、走者がいない場合はペナルティがなくなった。したがって、イリーガルピッチは、定義 38 のとおり投手板に触れないで投げた投球と、クイックリターンピッチに限定された。(6.02(b)、定義 38)</u></p>	2018 改正
130	<p>30 故意に打者を狙って投球する</p> <p>投手は意図的に・・・本規則を厳格に適用しなければならない。(6.02 (c)(9)[原注])</p>	<p>30 故意に打者を狙って投球する 第 1 センテンスに続き、次のセンテンスを挿入する。</p> <p>投手は意図的に・・・本規則を厳格に適用しなければならない。(6.02 (c)(9)[原注])</p>	2018 改正

		<p>2018年の改正で、6.02(c)(9)[原注]冒頭に、次が追加された。</p> <p>チームのメンバーは、本項によって発せられた警告に対し抗議したり、不満を述べたりするためにグラウンドに出てくることはできない。もし監督、コーチまたはプレーヤーが抗議のためにダッグアウトまたは自分の場所を離れば、警告が発せられる。警告にもかかわらず本塁に近づけば、試合から除かれる。</p> <p>この規定は、OBRには以前から書かれていたものであるが、「原文に忠実に」の観点から、2018年の改正で我が国の規則書に採用されたものである。</p> <p>なお、6.02(c)(9)の太枠の囲いについても2018年の改正で削除されたが、その経緯は1981年OBR採用、'95年日本規則書採用、'96年OBR削除、2018年日本規則書削除となっている。</p>	
142	<p>10 故意の妨害</p> <p>妨害行為かどうか、・・・走者にアウトを宣告する。(6.01(a)(5))</p>	<p>10 故意の妨害</p> <p>末尾に次を追加する。</p> <p>妨害行為かどうか、・・・走者にアウトを宣告する。(6.01(a)(5))</p> <p>したがって、前ページの例題(3)のケースで、ショートからの送球を受けた二塁手が、一塁は間に合わないと考えて、三塁をオーバーランした二塁走者をアウトにするため三塁に送球しようとしていたとき、すでにアウトになっている一塁走者に妨害された場合、守備の対象であった(三塁にいる)二塁走者がアウトを宣告される。</p>	2018 追加
149	<p>16 攻撃側チームのメンバーによる妨害</p> <p>例題：打者が遊撃手にゴロを打ち、・・・。(あえて避けようとせず野手と衝突した場合は“故意”とみなす)。(6.01(b)【注2】)</p>	<p>16 攻撃側チームのメンバーによる妨害</p> <p>例題の末尾の(6.01(b)【注2】)を(6.01(d)[原注])と変更し(下線部分)、次のセンテンスを追加する。</p> <p>例題：打者が遊撃手にゴロを打ち、・・・。(あえて避けようとせず野手と衝突した場合は“故意”とみなす)。(6.01(d)[原注])</p> <p>2018年公認野球規則の6.01(d)[原注]の“例”は、OBRには以前から記載されていたが、我が国では2012年の改正で採用した。そして、2013年の改正で、この“例”は一塁ベースコーチの妨害の事例を紹介しているので6.01(b)(攻撃</p>	2018 改正

		側メンバーまたはベースコーチの妨害を規定)に記載したほうが適切との考えから、6.01(b)の【注2】として移動させた。しかし、この“例”は「妨害をした者」を問題にしているのではなく、「故意か否か」の判断の参考例としてOBRには記載されているのではないかとの判断から、また、「原文に忠実に」の観点から、2018年の改正でOBRのとおり6.01(d)[原注]“例”とした。	
164	35 観衆の妨害 観衆がインプレイのボール(打球または送球)を妨害した場合、またはインプレイのボールを守備しようとしている野手に触れたり、じゃまをした場合、・・・	35 観衆の妨害 最初の2行を次のように変更する。(下線が変更部分) 観衆がインプレイのボール(打球または送球)を妨害した場合、または競技場内に入ったり、スタンドから乗り出したり、または競技場内に物を投げ込んで(2019年の規則改正で定義44(d)“観衆の妨害”に「観衆が物を投げ込んだ場合」が追加された)、インプレイのボールを守備しようとしている野手のじゃまをした場合・・・	2019改正
181	付表 公認野球規則 アマチュア野球内規 2017 1) フォースプレイのときの0アウトまたは1アウトの場合、妨害した走者と、打者走者にアウトが宣告される。すでにアウトになった走者が妨害した場合も、打者走者にアウトが宣告される。ただちにボールデッドとなり、他の走者は進塁できない。	付表 公認野球規則 アマチュア野球内規 181ページの2017を2018に、183ページ4行目の2017年を2018年に、 同6行目の2017年2月を2018年2月に、187ページ下から2行目の2017年2月を2018年2月に、それぞれ変更する。 186ページのペナルティ1)を次のように変更する。(下線が変更部分) 1) フォースプレイのときの0アウトまたは1アウトの場合、妨害した走者と、打者走者にアウトが宣告される。すでにアウトになった走者が妨害した場合は、 <u>守備側がプレイを試みようとしている走者にアウトが宣告される。ただちにボールデッドとなり、他の走者は妨害発生時に占有していた塁に戻る。</u>	2018改正